

## 慕情

喜多川雅人

香港島のヴィクトリアピーク沿いにひよろりと聳えるアパートでランチを摂っていると、ボールを打ち合う軽やかな音が舞い込んできた。開け放った五階の窓から望んだ下方では、隣りのアパートのハードコートでダブルスが行われている。なかなかの腕前だ。旧正月の直前に単身赴任し、歓迎会や新年会で辟易していた四十三歳の身体が求めるまま、持ち前の怖いもの知らずで、門を叩いた。

「北川琢磨です。TAKと呼んで下さい。最近日本から着任しました。航空会社のアジア・オセアニア支配人室で、広報・渉外を担当しています。テニスは学生時代からやっています。ご一緒させて頂ければ嬉しいのですが…」

「ペレイラです。丁度よかったです。一人が早目に抜ける場所でした」

「私はチュン、香港チャイニーズです」

「私はクワン、パキスタン人です」

簡単な自己紹介が終わり、小一時間、快適な汗をかく。終了後、最年長と思しきペレイラのアパートに招かれ、軽くビールで打ち上げた。海運関係のジャーナリストとか…。郵船など日本企業のテニス仲間も何人か来るといふ。

「毎週土曜日の午前中に二時間やっています。いつでもどうぞ」

仲間入りが認められたようである。数回の週末テニスですっかり打ち解けた頃、ペレイラからランタオ島に誘われた。

「デイスカバリー・ベイにシーランチという洒落たリゾートが完成して、来週末のオープニング・セレモニーに招待されています。記念行事でミック・ダブルスのトーナメントがあるけど、一人男性が足りないとか……」

「泊二日でいかがですか？」

願ってもないご招待である。両腕を拡げて、満面笑顔でコクリと頷いた。

デイスカバリー・ベイには、高速のホバークラフトが、香港島から三十分足らずで運んでくれる。船上でトーナメントのパートナーを紹介された。

「ウエンデイ・シンさんです。私と同じで、ポルトガルと中国人のミックス。

」主人はインド人で、Asian Wall Street Journal(ASWJ)の記者をやっています。彼はテニスをやらないので、今日はお仲間とコントラクト・ブリッジとか……」

「ウエンデイです。よろしくお願いします。極東PR代理店で働いています」

十六組が参加して、八ゲーム先取の試合が、激しい雷雨を挿んで行われた。ゲームを重ねるにつれ、息がぴったり合い、決勝では、二人とも陶酔状態に似た集中度で、難敵と思われたペレイラ組を制して優勝した。夜は赤ワインで盛大に祝杯を重ねる。

2

ウエンデイが勤める広報代理店はコーズウェイベイにあり、社長は英国人のピーター・フィッシュ。オックスフォードの出で、キャセイ航空が所属するスワイア・グループから独立して広報代理店を開業した。中国にも深く人脈を持っており、アジア・オセアニアの各地にネットワークを拡げているという。

J社の国際線旅客収入の四分の一は香港、台湾、中国路線から上がる。北川には、表の広報業務のほかに、特命事項がある。路線運営への影響を最小に止めるため、一九九七年の香港返還問題を巡る中英交渉の帰趨をいち早く読み、本部に届ける情報活動である。

当時の広報代理店は情報活動面では心もとなかったから、ウエンデイを介して、フィッシュと面談し、慎重に調査した結果、一ヶ月後には、極東PR代理店に契約を切り替えた。

初めての会合での彼の挨拶が印象的だった。

「My name is Fish. I love fishing. If you like to join me fishing in Hong Kong, you would be most welcome on my fishing boat (フィッシュユです。名前の通り釣りが大好きです。香港で釣りを楽しみたいなら、私の釣り船でどうぞ)」。

J社の担当は勿論ウエンデイである。広報業務はもっぱら秘書に任せ、北川は、フィッシュユが収集分析した中英交渉の情報を受け取り、取捨選択して本部にレポートすることに専念した。毎週火曜日の十一時にウエンデイがタイプアウトした書類を北川に届ける。秘書が広報業務をウエンデイと打ち合せる間に、書類に目を通す。終わるとウエンデイを誘い、フィッシュユの推薦で特別に入会が認められた外国人記者クラブ (FCC) でビジネスランチする。仕事柄、東京の本部のほか、域内各地への出張がほぼ隔週で入ったから、正確には二週間に一度であろうか。

極東一と言われる由緒ある FCC は、セントラルからヴィクトリアピークに向かう急坂の一角にある。瀟洒なレンガ造りの建物は倉庫を改造したものである。ピューリッツァー賞に輝いたフォト・ジャーナリスト沢田氏の写真が壁に飾られている。ベトナム戦争の最中、女が幼児を抱えて川に逃れ、必死に難を逃れんとする情景を鋭く切った一枚だ。見るたびに北川の愛国心をくすぐる。一階には薄暗く円形に広いメイン・バー、二階にメイン・ダイニング、地下はビリヤードなどがあって、インテリジェンスの坩堝といった妖しい雰囲気は隅々に漂う。会費が高い分、食事やバーは実にお手頃な代金で、リッチに楽しめる。日本人の特派員も何人かはメンバーだが、あまり目に付かないのは、こういう場所でのつき合いが苦手なのかもしれない。

ウエンデイとのビジネスランチは、赤ワインのグラスで軽く乾杯してから始まる。

数ヶ月たち、極東PR代理店との仕事は完全に軌道に乗った頃だった。

「今日はフィッシュユが台湾に出張でいないの。私も午後から休むから、もう一杯頂いてもいいかしら？」と、ウエンデイ。

「モウマンタイ (広東語で「問題ないよ」)。僕も付き合うよ」

一時間余りの昼食が終わると、ほんのり赤くなったウエンデイの足元がおぼつかない。

「大丈夫？ もしよかったら、僕のアパートで濃いグリーンテイでもどう？」

頷く彼女をタクシーに押し込み、ロビンソー・ストリートのアパートに…。管理人が目を光らせている一階は避けて、駐車場の地下から薄暗く狭いエレベーターで五階に上る途中、ウエンデイの腕が北川の腕に柔らかく絡んだ。日頃の緊張感からどっと解放されたように、北川の身体から力が抜ける。テニスで味わった阿吽の呼吸が戻った。

グリーンテイを待たずに奥のベッドルームにもつれるように倒れこんだ。堪らず抱きしめる。控え目で口が重いウエンデイは、ベッドの上でも声が心もとなく小さい。着ているものを静かにとりながら、愛撫する。五分、十分、十五分、驚くほど肌理の細かい白い肌が湿り気を帯びでピンクに染まると、低いアルトのピアノシモがかすれるようにクレシェンドした。北川のベースがオクターブ下で唸った。下から響く。「Yes, イエース」。ミックス・ダブルスのウイニング・ショットが鮮やかに決まった瞬間である。

以来、ウエンデイがグラス・ワインの二杯目を求めれば、それが合図となって昼下がりの密やかな情事が繰り返された。

一九八一年九月三十日に全国人民代表大会の葉劍英委員長が、台湾との統一に関する「九項目提案」を発表した。後に香港にも適用される「一国二制度」の原型が盛り込まれている。

フィッシュから極秘のレポートが上がった。「先が見えてきた感じがする。主権問題で鄧小平とサッチャーの溝は全く埋まっていないから、樂觀は禁物だし、交渉がいつ終わるか分らないが、中国側からのメッセージは英国側に伝わったと思う」。

フィッシュは鄧小平とも電話でやりとりできるといふ香港在住の中国側要人とも通じている。その要人に北川は何故か気に入られた。駄目を押すつもりで、それとなく要人を探ったところ、答えはなかったが、肯定を包み込むような大らかな頬笑みが還ってきた。

思い切って本部に中間報告した。「一件落着の可能性大。一九九七年問題の決着により大きな混乱はなく、実質的に路線運営に支障はあり得ないと考えられる」。

一年後、一九八二年の九月を迎えてサッチャーが訪中、香港における英国行政権の継続を求めた。鄧小平は拒否したが、外交交渉開始で原則合意すると、十二月には、中国の国会に当る全国人民代表大会で、社会主義を実行する必要がない「特別行政区」設置が認められた。将来の香港に適用されるという。

年が明けて一九八三年の三月、主権問題を現実的に処理しようとする英国側は、「妥当な解決策が見いだせれば、香港の主権の委譲を議会に提案する」旨表明した。主権が中国側にあることを明示したのだ。紆余曲折、表裏で外交交渉が進む。

北川の情報集めも忙しさを増した。頼みとするフィッシュ・レポートの頻度が増し、それに伴ってウエンデイとの仲も深まる。蒸し暑い香港にも秋風が漂う十一月の半ばになって、中国政府の香港マカオ担当大臣である姫鵬飛の談話が発表された。「中国は九七年以後五十年間、香港の現状は変えない」という。

交渉が重ねられた半年後の一九八四年四月には、英国のハウ外相が「一九九七年以後も英国が香港の行政権を行使するという考えは現実的でない」と表明、更に八カ月の駆け引きを経て、十二月十九日にサッチャー・趙紫陽により中英共同声明が調印された。まずは一件落着である。

一九八四年の旧正月が終わると、フィッシュが事務所を訪れた。

「ウエンデイの後任のキャサリンです。ウエンデイは連れ合いが AWSJ の豪州支局に異動になり、彼女には極東 PR 代理店のサブ・エイジェントとしてシドニーで働いてもらうことになりました。二人は昨日の便で出発しましたよ」

ウエンデイからは何の知らせもない。あつと驚く北川に、フィッシュが帰り際に囁いた。

「北川さん、少々釣りに深入りすぎたみたいですね。やりすぎると危ないこともあります……」と、軽くウインク。

同じ日の午後、小さな封書が届いた。中には「慕情」のカセットテープが包まれていた。添えられた外国人記者クラブのカードには、”Talk, till we meet again sometime, somewhere, many many thanks & love. Wendy.”と柔らかい手書きで添えられていた。名前の後に記された小さなX印がたまらなく愛おしかった。

そして数日後、紹興酒の二日酔いで遅めに出勤をすると、支配人が呼び出す、との秘書からの伝言がデスクに載っていた。

「支配人、何か御用でしょうか？」

「北川君、君のレポートが正しいと証明されたね。もういいだろう。」

ところで、君の異動のことだけど…、ここで四年になるよね。で、北海道支社への異動の話があつてね。人事本部がいうには、こういう仕事の後は暫く本社を離れた方がよいというのだ。札幌ではナンバーツウだけど、二、三年で本社のしかるべきポストに戻すそうさ。

黒子になつての情報活動、大変だったろう、ご苦労様でした。もっともそれなりに楽しんでいるという噂は聴いているから潮時かもね(笑)……。 (完)